

十三夜（抜粋） 樋口一葉

嫁入りてより七年の間、いまだに夜に入りて客に來しこともなく、土産もなしに一人歩行して來るなど悉皆ためしのなき事なるに、思ひなしか衣類も例ほど燦かならず、稀に逢ひたる嬉しさにさのみは心も付かざりしが、聳よりの言伝とて何一言の口上もなく、無理に笑顔は作りながら底に萎れし処のあるは何か子細のなくては叶はず、父親は机の上の置時計を眺めて、これやモウ程なく十時になるが関は泊つて行つて宜いのかの、歸るならばもう歸らねば成るまいぞと氣を引いて見る親の顔、娘は今更のやうに見上げて御父様 私 は御願ひがあつて出たので御座ります、どうぞ御聞遊してときつとなつて畳に手を突く時、はじめて――トしづく幾層の憂きを洩しそめぬ。

父は穩かならぬ色を動かして、改まつて何かのと膝を進めれば、私は今宵限り原田へ歸らぬ決心で出て参つたので御座ります、勇が許して参つたのではなく、あの子を寐かして、太郎を寐かしつけて、最早あの顔を見ぬ決心で出て参りました、まだ私の手

より外誰れの守りでも承諾せぬほどのあの子を、欺して寐かし
て夢の中に、私^{うち}は鬼に成つて出て参りました、御父様、御母様、
察して下さいませ私は今日まで遂ひに原田の身に就いて御耳に
入れました事もなく、勇^{いさむ}と私との中^{なか}を人に言ふた事は御座り
ませぬけれど、千度^{ちたび}も百度^{ももたび}も考へ直して、二年も三年も泣^な尽し
て今日といふ今日^{もろ}どうでも離縁を貰^{もら}ふて頂かうと決心の臍^{はそ}をか
ためました、どうぞ御願ひで御座ります離縁の状を取つて下され、
私はこれから内職なり何なりして亥之助^{いのすけ}が片腕にもなられるや
う心がけますほどに、一生二人で置いて下さりませとわつと声た
てるを嚙^{かみ}しめる襦袢の袖、墨絵の竹も紫竹の色にや出ると哀れ
なり。